



PREX NOW

No. 97

September
2000

財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1 ●セミナー

企業経営のあり方を共に考える
アジア企業経営研修

page 2～3 ●シンポジウム

これからの関西とアジアの交流はどうか
設立10周年記念シンポジウムを開催

page 4～5 ●PREX10周年記念特集

メッセージ／関西経済同友会 萩尾 千里氏
PREXインドネシア同窓会長 クスナエニ氏

page 6 ●PREXだより

JICA国際協力功労者表彰を受賞
仏エセック商科大学院大学生来局
大阪経済記者クラブとの懇談会を開催
日系ブラジル人松井さんPREXで研修中
PREX井上理事長 被爆体験を本に
8月実施の研修
9月実施の研修



セミナー

SEMINAR

企業経営のあり方を共に考える アジア企業経営研修

中国、インド、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、ネパール、パキスタン、スリ・ランカ、タイの9カ国から総勢13名、主に各国行政・金融機関から多彩な顔ぶれの研修員が集まり「アジア企業経営コース」（国際協力事業団より受託）はスタートした。7月3日から23日までの3週間、今年で4回目の実施となる。この研修は、日本の企業経営の歴史的な発展過程や現状を講義や企業訪問を通じて紹介する中で、研修員が今後の企業経営のあり方について共に考え、討議することを目的としている。



1997年国際都市京都の玄関として改築竣工された京都駅ビルについて説明を受ける研修員



第一樹脂工業にて携帯電話の成形・加工について説明を受ける研修員

IT革命の行方

今回研修員からの興味が高かったものの一つに、ITをいかに企業経営に利用するかというテーマがある。同テーマに関して研修員は、IT利用の実践事例について理解を深めるため、東京都内のスポーツ用品メーカーで、昨年からEC（Electric Commerce：電子商取引）サイトを立ち上げ、同社製品の販売を開始したサロモン&テラーメイド社を訪問した。同社が昨年実施したECキャンペーンの折、キャンペーン用に用意したスキー板百組がウェブ販売の開始からたったの15分間で売り切れてしまったこと等の説明を聞くに及び、研修員は企業経営におけるIT利用の大きな可能性を確信したようであった。

21世紀に向けての企業経営

研修では、大手繊維メーカー東洋紡の経営トップから直接話を聞く貴重な機会を得た。同講話において研修員は、東洋紡が国内繊維産業空洞化の危機に陥った際、長年培ってきた繊維技術をベースに製品群の多様化を進め困難を切り抜けてきた経験から、21世紀に向けての新しいビジネスの創出にあたっては、自社のコア技術をいかに成長市場に展開するかが鍵であるとのアドバイスを受け、感銘を受けた様子であった。

グローバルではなく、グローカル

グローバルスタンダードに則った企業経営とは今日よく取り上げられる問題である。しかし今回の研修に参加する中で、それはグローカル（グローバル＋ローカル）スタンダード、つまりグローバルスタンダードを各国事情に適応させたものでなければならぬことを実感した。「アジア」と一括りにしてみても、各国文化や宗教が異なるのみならず、経済の発展段階も各国各様である。したがって、今回の研修で学んだことも研修員によって自国に相応しい形に応用され、各国ごとに特色のあるグローカルが育つことを切に希望している。

—国際交流1部 武田 志保

お世話になった企業・団体（訪問順・敬称略、本文中の団体は除く）

第一樹脂工業、三洋電機、NTTデータ、東芝、トランス・コスモス、ジェイアール西日本伊勢丹、京都駅ビル開発

これからの関西とアジアの交流はどうあるべきか 設立10周年記念シンポジウムを開催

PREXは設立10周年を記念して7月4日、国際シンポジウム「21世紀の文明交流～関西とアジアのつきあい」(朝日新聞社・朝日21関西スクエア共催)を大阪国際会議場特別会議場にて開催した。当日は、PREXの関係者66名、朝日新聞案内による応募者480名が参加した。

山崎 正和・東亜大学学長と寶 瑞華・重慶市政治協商会議副主席が基調講演。これを受けて4人のパネリストが、五百旗頭 真・神戸大学教授をコーディネーターに21世紀の関西における国際交流、人材育成がアジアとの関係でどうあるべきか論議を深めた。

以下、発言から抜粋。



(写真提供：朝日新聞)

基調講演

山崎 正和氏
—東亜大学学長

日本を本当に
世界に開くために



世界を動かす原理は「国際化」から「グローバル化」へと変化がみられる。国際化は国家が進めてきたが、グローバル化の時代は顔の見えない市場や世論が世界を動かす。

しかし世界が一つになっても、人間はある地域に暮らしており、国家や地域の力は必要である。市場の生み出す富は、福祉という形で再分配を考えなければならない。また治安が悪いところで金融機関は育たないし、創造的な経済活動には思想や言論の自由が必要である。これらを守るのは法と制度を備えた国家である。

ここに大きな逆説がある。市場というグローバルな世界が生き生きとするには、元気で公正な国家、地域社会が必要なのである。その元気を作るのは、多文化・多民族社会である。

新しい発明やものの見方は、違ったひと同士のめぐり合いの中から生まれる。文化の飛躍、発展には必ず異文化の接触があった。日本も少子社会になるこれからは、本気で多民族化しないと将来はない。若い、知的な人材を呼び入れるようにするべきである。

関西は、過去の遺産に頼るだけではない。近代的な価値を関西で実現して、外国人に対する新たな魅力を持つべきで

ある。大阪の町自体の持つ文化、大阪に集まる世界の文化を楽しむ都市的な魅力を備えたい。アジアの中堅的な人材に的を絞って、交流の機会をつくりたい。たとえば関西で放送大学を作り、長く留学をしなくても学位を取れる仕組みを作ったり、2008年の五輪は北京との共催を提案するなど、ゼロからの出発をするつもりで、多文化、多民族化の先頭を切るべきである。

寶 瑞華(トウリイフォア)氏
—重慶市政治協商会議
副主席

中国の西部大開発と
国際交流



中国の西部開発は現在注目を集める話題である。西部は10の省、自治区などからなり、人口は中国全体の23%、面積は56%を占める。鉱物や石油などエネルギー資源は豊富なのだが、水不足や砂漠化で耕地が減るなどして、貧困がもたらされた。約20年前から始まった「改革・開放」路線は、先に東部が発展し、その力で西部を豊かにしようという考え方で、経済格差が広がった。中国の貧困者の9割が西部に集中する。これには、西部の人々の市場経済に対する考え方などが遅れているという理由もある。

これまで中国は高度成長を遂げたが、これからは厳しい国際競争にさらされる。国全体が持続的成長をするためにも、西部開発が必要になるがまずは人材不足が問題である。西部の人々の考え方を改め、人材不足を補うために国際交流は重要で

ある。特に近隣の日本との交流は大切である。

パネル討論

五百旗頭 真氏
—神戸大学法学部教授
(コーディネーター)

世界に広がりのある
ネットワークづくりを



いま、グローバリゼーションとIT革命に背を向けるのは意味がない。グローバリゼーションには米国のスタンダードの身勝手さという面は確かにあるが、それにすねないで波乗りをし、超えていくというバネを持つことが大事だ。

しかしこの間、自由主義は持てるものをますます豊かにする一方で、貧しいものをさらに追い詰めるという格差を生んだ。21世紀へ向けては富の再分配機能を加味し、世界の仕組みをより公平なものにしていく必要がある。

関西地域もそんな流れの中でいろいろプロジェクトを進めていくべきだ。大阪にはもっと人を引きつける工夫が必要だ。その意味で、福岡は大阪よりも上だと思う。ここだけではなく、世界に広がりのあるネットワークづくりが大事だ。

山本 信孝氏
—三和総合研究所会長
関西の使命

21世紀のアジア文明
はこれまでとはけた違い



の量やスピードで交流が進み、グローバルスタンダード(世界標準)という名の西洋の文明に押しまわられていくのではないか。一部の強国のスタンダードを世界のルールにするのではなく、世界の全ての人に一番望ましい、これからのグローバルスタンダードはどうあるべきかを国際的な場で決定し、共通のルールにしていくこと、そしてお互いに各国の伝統文化を認め合い尊重する、この二つが大事なことであろう。関西としてのアジアへの使命は、アジア人と協議しながらアジア総意のグローバルスタンダードを作り上げ、世界に発信していく役割を果たすこと、そしてアジア各国の人々との交流を深めることである。

彭 飛氏

一京都外国語大学助教授

経済の発展とともに 文化をまもる



日本人は気配りが豊かで社会にいろいろなルールが多い分、若い人の活躍の場が少ない。日本の大学生は一年でも半年でも、アジアの発展途上国で、パワーを吸収するのもいいと思う。中国では、二、三十代の社長が本当に多い。アジアの経済人に大阪に来てもらうためには例えばアジアの中小企業の協議会、プラスチックや電器といった業界ごとの横のつながりをもった本部をつくるのはどうか。また、戦略的な研究所も設けるべきだ。三十年、

五十年という長い目で見て種を蒔く努力が必要である。

関西とアジアとのかかわりにおいて、21世紀の最初の十年か二十年は、信頼関係をどのように結び、あるいは回復するかが課題の一つであるが、経済を發展させると同時に文化のいいところをどう守るか、これが20世紀の教訓であり、21世紀の課題である。

ステイーブン・リヨン氏

一マレーシア戦略国際問題研究所副所長、PREXマレーシア同窓会長



人材開発はアジアの鍵

私たちは日本をリーダーとしてみてきたし日本から経済を教えてもらった。マレーシアからPREXの研修に参加した人数は280名にのぼり、私自身1992年にPREXが準備した経営研修に参加した。PREXには今後も新しい、よりすぐれた研修プログラムを準備してもらい、より多くの人が日本にすることができるようにと考えている。また、日本へ来た人々は、日本に対して創造的な新しい意見を提案することができらう。

人材開発はアジアの鍵だ。IT(情報技術)の時代になり、新しいことを学ばなければならない。われわれが一緒になって経済發展が遅れている中央アジアやアフリカにも手を差し延べたい。われわれは多民族

国家であり、南アフリカ、ボスニア、セルビアにもモデルを提供できる。大阪の人々にも学んでほしい。また、日本の文化基盤は関西にあるとマレーシア人は思っている。文楽、生け花すべて関西。われわれが日本をみる時こうしたものに目が向く。関西には日本の文化の基盤がある。

松尾 カニタ氏

一エッセイスト、FM CO-CO-LO
プログラムスタッフ



コーディネーターとしての PREXの役割

関西の場合、外国との関係で一番重点をおかなければならないのはアジアである。まず、人の流れを関西に持ってくる。そのためには日本や相手国をよく知っているコーディネーターが必要である。関西の人には人の交流をなめらかにする上で重要なホスピタリティーがある。しかし高度な技術、ノウハウなどはマニュアルでは伝えられないので、技術を持っている研究所や企業と、相手国の要望を結びつけるコーディネーターが必要になる。

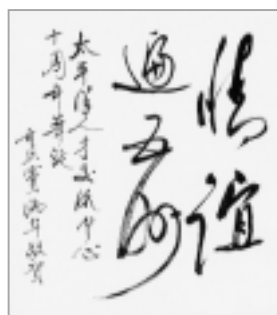
PREXは、設立以来10年間国と国との経済交流に携わってきた関西にしかない団体である。私はPREXが各国のニーズに応えるという点で非常に重要な役割を果たしているし、今後の活動にも期待している。

コラム 重慶市からの訪問団

PREXと重慶市とは約10年にわたる友好交流があり、共同委員会を発足し、中小企業振興や社会開発をテーマとする研究活動、シンポジウム開催、報告書の発行を行ってきた。今回のシンポジウムで基調講演をお願いした寶瑞華前重慶市副市長は、現在中国人民政治協商会議重慶市委員会の副主席という立場(国の副大臣クラス)である。寶氏は、PREXが重慶市と共同研究をしていたときの中国側メンバーの一人であり、以前にPREXを訪問されたこともあった。

寶先生と随員5名の皆さんは7月3日から8日の日程で、それぞれの職務に関係する国際電気通信基礎研究所、大阪市立博物館、住友病院、重慶経済事務所と北九州市役所等を訪問し、意見交換を行った。寶先生は何事にも大変興味をもたれる方で、予定した時間を超えて質疑応答が続く場面もあったが、ご対応いただいた皆様のおかげで、大変収穫の多い視察になったと大変喜んでおられた。

(国際交流2部 酒井 明子)



重慶市寶先生の即興詩(色紙)

育材及四海 情誼遍五洲:育て上げた人材が世界津々浦々にまで及び私たちの友情も広がっていく 太平洋人材交流センター設立10周年を祝して 重慶市寶瑞華



PREX 常任幹事からのメッセージ



PREX設立10周年に寄せて

社団法人 関西経済同友会
常任幹事・事務局長

萩尾 亨

「三億円や五億円ではちゃんとした仕事はできんちがうかなあ。せっかくなら最初から、二、三十億というまとまった金を集めてやった方がきっちりしたことができる思うよ」

PREX設立の話がいよいよ煮詰まり、募金額をいくらにするかを決めるために、われわれ関係者数人が集まった時、故山田稔さん(当時ダイキン工業社長)は神田延祐さん(当時三和銀行副会長)と口裏を合わせたように突如としてこう切り出された。

◎PREX設立裏話

設立の事務方を務めてきた三和銀行の皆木武久さん(現三和総合研究所経営情報開発部長)と私らとの間では「小さく生んで大きく育てよう」を合言葉に、三億～五億円の基金を元手にとりあえず出発しよう、という暗黙の合意ができていた。われわれが募金額を少額に抑えることにした理由は、途上国の人材養成に経済界の理解と協力がどれだけ得られるか、極めて心もとなかったからである。

手元資金の額は大きければ大きいほど良いに決まっている。だが、目標額を大幅に下回れば逆に信用が失墜し、構想そのものがぶち壊しになりかねない。大風呂敷敷くとも思える山田さん、神田さんの突然の提案に私どもは大いに戸惑いを感じたものである。事実、世間でもそういう受け止め方が普通だった。しばらくして来阪された国際協力事業団(JICA)の幹部の人にこの募金構想を話した時のこと。その人は「それは結構なお考えですね。ただ志はともかく、こういうものは終わってみれば計画の十分の一なんてことはよくある話ですよ」とひやかしても本気ともつかぬ言葉をいだった。

結果は、終わってみれば十分の一どころか、募金額は目標額をはるかに上回る三十五億円にも達した。「バブル経済」という追い風も幸いしたが、山田さん、神田さん、更にはこのご兩人を支えた井上義國さん(当時ダイキン工業常務)の高い志と情熱があったればこそ今日のPREXがあるといえよう。

◎PREX設立のきっかけはPECC日本総会

PREX設立のきっかけとなったのは1988年5月のPECC(太平洋経済協力会議)日本総会だった。この大阪開催誘致は関西経済同友会代表幹事OBの山田さん、神田さん、高橋壽常さん(当時日本生命保険副社長、関西経済同友会代表幹事)の発案で実現した。私が総会の大阪開催を知ったのは、正直言って新聞社を退職して同友会に入った1987年の初めだった。大阪府、市、経済団体挙げて誘致したのはいいが、もう一年しかないのに地元の受皿組織、事務局、資金手当(約一億五千万円)も全く手付かずのままだった。

結局、同友会が地元開催事務局を務め、三和銀行、ダイキン工業の協力を得て総会は盛会裏に閉幕することができ、外務省当局から高い評価をいただいた。この時、井上義國さんを中心に知恵をしばってつくり、総会で宇野収関経連会長から発表してもらったのがPREX構想であった。

山田さん、神田さん、井上さんの情熱に加え、山本信孝さん(当時三和銀行専務、現三和総合研究所会長)の協力、更には事務局の奮闘がなければ今日のPREXの存在は考えられない。創立10年を迎え、初期の目標へ向かってますますその存在感を発揮しつつあるPREXを見るにつけ感無量に耐えない。

PREX 同窓会長からのメッセージ



PREXインドネシア同窓会長

クスナエニ氏(インドネシア-日本起業家協会 事務局長)からのメッセージ

—1990年度関経連アセアン経営研修参加

PREX設立10周年おめでとうございます。

PREXインドネシア同窓生85名を代表して心よりお祝い申し上げます。

10年というのは、人間の人生の中で考えてみるとほんの子供に過ぎませんが、PREXのこの10年間の活動は非常に意義があります。

PREXの誕生前から関西経済連合会が、アジア諸国に対して「関経連アセアン経営研修」を行ってきました。そしてPREXが設立された10年前からこの関経連の素晴らしい仕事がPREXに引き継がれ、現在では、さらに充実した研修になっています。

PREXのおこなう研修プログラムは、常に効果的で、地域のニーズに応えるよう工夫されています。アセアン地域に住む我々は、こうしたPREXの対応に感謝し、そしてPREXの努力に報いることができるように最善を尽くしています。

PREX職員の声

PREX10周年、私10年目

国際交流2部 主任 森光 恵美子

PREXが設立されて1年が経とうとしていた、1991年春、私はPREXのメンバーの一員となった。PREXはこの10年間で、少しずつではあるが、変化・発展してきた。「研修」という面だけをとってみても、設立当初はASEAN地域を主な対象としていたが、今ではそれに加えて、東アジア、旧ソ連、アフリカ、南米など全世界的な規模に拡大している。

研修のテーマも、地域の拡大や社会経済状況の移り変わりに伴い、様々な分野へと広がってきている。また、これまでに研修に参加した人数は、5000人を越えるまでとなった。何よりも、PREX自体のメンバーの入れ替わりは、丸9年という年月を表



簿記・会計訪日コース参加者と
筆者森光(左端)

すかのようである。出向の皆さんを含め、職員が変わるとともに、PREX自体もその色を変えてきたことと思う。今PREXの「10周年」、自分にとっては「10年目」という節目に当たり、ふと、自分自身に立ち返ってみると、この10年間のPREXの変化に伴って、自分はどれだけ成長することができたのだろうか、と改めて考えさせられます。

印象に残る研修員の一言

国際交流1部 主任 三浦 佳子

1991年度ポーランド経営管理研修の初日、緊張していた私を迎えてくれたのは、彼の人懐っこい笑顔だった。ラドモール社(無線通信)営業部長を務めていたコモロフスキーさんは、研修で取り上げた企業の財務管理に興味を惹かれ、帰国後本格的に勉強しはじめた。会社を辞め、大学の経営学部で教えながら、日本企業の財務管理に関する論文・書籍を出版し、体を壊しながらも、ようやく博士号を取得。現在は、グダンスク技術大学経済経営学部教授である。

わたしの印象に残る彼の一言。

「私の論文や講義によって、湖に投げた小石のように波紋が広がっていくことを期待したいのです。なぜなら、日本での研修が小石となって、私の心に波紋を引き起こしたのですから」



ポーランドからの研修参加者と筆者三浦(前列左から6番目)

PREXはこの4月で設立10周年となりました。機関紙「PREX NOW」では10周年を記念してPREX職員、OBの皆さん、研修員からのメッセージや、産官学各界からのPREXへのご意見の特集をしています。読者の皆さんもPREXについて、国際交流について日頃お感じになっていることをご寄稿下さい。…………… ◎あて先/電子メールアドレス: prex@prex-hrd.or.jp FAX: 06-6441-2640 総務経理部 部長 細江まで

事務局
ニュース

JICA国際協力功労者表彰を受賞

PREXは7月28日、JICA（国際協力事業団）より平成12年度国際協力功労者に対する感謝状の贈呈を受けた。設立以来、開発途上国の人材育成・交流に邁進してきたPREXの活動が評価され、今回の受賞となった。JICAは毎年設立記念式典において、JICA事業の推進に協力した団体、個人を国際協力功労者として功績をたたえる感謝状を贈呈している。PREXのほか12団体26個人が受賞。JICA大阪国際センターから、今回の受賞について以下のコメントをいただいた。



PREXは、大阪国際センターの分野特性の重要な分野である中小企業振興、市場経済に関する研修コースを一手に受入れており、現在、中小企業振興関連コース6コース、市場経済関連コース4コースの計10コース年間130名の研修員を受入れている。

特に、中央アジア、東欧諸国の市場経済化に伴う我が国の支援策である国別、地域別研修コースに対しての積極的な取り組みは、研修員からも高く評価されており、JICAの市場経済化支援の実施団体として多大な貢献をしている。また、開発途上国における中小企業振興コースの実施に際しては、本研修コースを通じ、関西経済連合会傘下の各種企業とJICAのパイプ役として、すなわちJICAを関西地域社会へ導入した功績は大きく、そのことにより大阪国際センターの関西地域での円滑な業務の実施に波及した効果も顕著なものがある。

（JICA大阪国際センター）

◎仏エセック商科大学院大学生来局

7月19日、住友生命保険相互会社が2カ月間企業内研修で受入れているフランスエセック商科大学院学生マティウグレートさんが研修の一環としてPREXに来局。PREX三田専務理事が民間の人材育成事業実施団体の事例としてPREXの組織や、事業活動について紹介した。

◎大阪経済記者クラブとの懇談会を開催

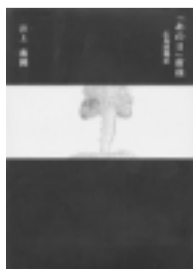
8月1日12:00～13:30、PREX会議室においてPREX井上義國理事長と大阪経済記者クラブ記者との懇談会を開催。11社11名の記者が参加。10周年記念事業の報告やJICAからの国際協力功労者表彰受賞の報告等をおこなった。

◎日系ブラジル人松井さんPREXで研修中

2000年7月11日～2001年6月29日、PREXは、国際協力事業団（JICA）が実施している日系研修員受入事業を受託。松井 トシミ ジャーネさんが、PREXの事務局の一員として日本の企業経営について学んでいる。この受入事業は、中南米地域の日系人を通じ、技術協力に必要な人材を育成する制度の一環。松井さんは、日本企業の事例を勉強し、ブラジル経済の発展に役立てたいと希望している。PREXではPREX内での研修後、様々な企業での実地研修を予定している。

◎PREX井上理事長 被爆体験を本に

井上義國PREX理事長（ダイキン工業特別顧問）は広島で被爆した自らの体験を出版した。『「あの日」前後 広島原爆記』（関西ジャーナル社発行）。14歳の少年の目に焼き付いて消えることのなかった凄惨な光景を、17枚の水彩画を交えてつづった。海外の人にも知ってもらいたいと英文もつけている。日本文124ページ、英文84ページ。本体は2,700円。書店では販売していないため、ご希望の方は関西ジャーナル社（Tel:06-6222-3338、Fax:06-6222-3730）までお問合せ下さい。



8月実施の研修

■中国中小企業振興コースを実施

- ◎日 時 7/4～8/6
- ◎参加者 中国生産力促進センター職員15名
- ◎内 容 中小企業振興の歴史と現在の施策

■インドネシアにて貿易分野特別研修プログラムを実施

- ◎日 時 7/25～8/18
- ◎参加者 一般公募120名
- ◎内 容 外国市場参入、輸出マーケティング戦略、国際競争力強化
- ◎開催場所 ジャカルタ、スラバヤ、ジョグジャカルタ

■青年招へい事業（ベトナム）を実施

- ◎日 時 7/26～8/2
- ◎参加者 ベトナム経済関係の公務員、貿易実務に従事する青年22名
- ◎内 容 中小企業振興施策

9月実施の研修

■キルギス・ウクライナにて中小企業講座開催

- ◎日 時 8/21～9/1
- ◎参加者 企業経営者、幹部各地40名
- ◎内 容 中小企業内組織運営のノウハウ、新規事業進出のポイント等の講義と演習
- ◎開催場所 キルギス日本センター、ウクライナ日本センター

■中国山東省済南市にて企業診断講座開催

- ◎日 時 9/4～15
- ◎参加者 企業経営指導に携わる行政官、団体職員70～80名
- ◎内 容 企業診断の手法の講義と実習
- ◎開催場所 山東省済南市

◎編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事・事務局長 三田 昌孝

大阪市北区中之島6-2-27 中之島センタービル24階
〒530-6691（中之島センタービル内郵便局私書箱60号）

TEL 06-6441-2650
FAX 06-6441-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prex@prex-hrd.or.jp